四天王寺大学紀要　第 59 号（2015年 3 月）

『さんげろく』にみえる“~”の分布

山　田　昇　平

1 はじめに

本稿では、中世末期のドミニコ会宣教師D. コリャードの手になる、キリシタン・ローマ字文献、『さんげろく』を扱う。本書には、様々なアセント符号[1]が用いられ、そのうちに“~”（til, tild）がある。この符号は、当時の中央日本語の音声事象である、濁音前鼻音を示すもので、基本的にガ・ダ行をあらわす子音字（g, d, zz）の前に付されることが指摘される[2]。本稿では、この指摘を踏まえた上で、“~”が付される環境をさらに細かに整理する。その結果、“~”は音韻語（Phonological word）の単位を規準に使用されている点、また濁音を含む言語形式であっても、この符合が付されないものがある点を指摘する。

2 問題設定

2. 1 山田（2012）

『さんげろく』における“~”の使用環境を調査したものに、山田昇平（2012）がある。同論では、“~”が主に濁音に前接する場合に使用されるとし、特にこの符号が、ガ行ダ行をあらわすg, d, zzの子音字に前接することが多く、ザ行バ行のz, j, bに少ない点を指摘した。そしてこれが、イエズス会宣教師J.ロドリゲスの『日本大文典』にみえる、当時の濁音前鼻音の記述と対応することを示した。また、同語を表記したものであっても、この符号が付される場合と付されない場合がある点から、本書の“~”を義務的に使用する必要のない、オプショナルな性格であるとした。つまり、山田（2012）に従えば、『さんげろく』で用いられる符号としての“~”は、音環境に応じて用いられるものの、その使用の有無は随意的に判断されるということになる。

2. 2 問題の焦点

2. 2. 1 分かち書きと“~”

このように山田（2012）では、“~”の使用環境および用法について整理している。このほかに、同論では“~”がスペースや改行といった表記上の区切りにも対応していることが示される。以下には同論より「表 2 」を引用する。

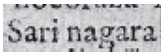
表２：後続する濁子音別の“~”												
子音字	b		d		g		j		z		zz		合計数
区切りの有無	無	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無	有	
“~” 有	103	1	339	51	261	119	1	0	3	1	39	5	923
“~” 無	156	70	78	238	118	334	46	67	273	57	12	5	1454
合計数	259	71	417	289	379	453	47	67	276	58	51	10	2377

これは濁子音字と、“~”が付されることが想定される前部の母音字との間の、スペースや改行といった表記上の区切りの有無に着目したものである。山田（2012：5）ではこの点について「スペースや改行等の区切りが有る場合は無い場合に比して“~”が付される数が少ない」とする。確かに、この表をみると、“~”が多く使用されるはずのd, g, zzであっても、分ち書きによるスペースや改行を挟む場合には“~”の使用数が少ない事が分かる。

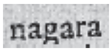
『さんげろく』を含む、印刷されたキリシタン・ローマ字資料では、日本語の書記法に分ち書きが使用される。この分かち書きには、語ごとを一単位とするか、後ろに続く、特に一音節の助詞なども続けて一単位とするか、ゆれがある3)。『さんげろく』では例外もあるものの、多くは助詞を分かつ形で書かれている4)。そのため、本書における分かち書きは、語を単位とするといえる。つまり、「表２」にあるような、区切りの有無による“~”の分布は、語頭か非語頭の差のようにもみえ、“~”は、分かち書きをされる語を単位として、使用されているとみなすこともできよう。ただ、間に分かち書きをはさんでも“~”を使用する例は少なくない。“~”がどの単位に基づいて使用されたのかについては、より詳細に確認しておく必要があるだろう。

2.2.2 語ごとの偏り

成嘻慶（1995）では『羅西日対訳辞書』（以下、『羅西日』）で、濁音前であっても、一貫して“~”が付されない語が存在することが指摘される。例えば、同論では『羅西日』で“nagara”（ながら）には一切“~”が付されないとする。また、成（1995：126）ではこれをうけて、「『懺悔録』にもティルデのマークが施されている用例は見つけられない」と指摘している。実際に本書でこの語を検索すると、全51例確認されるが、以下の図のようにいずれも“~”は付されない。つまり、本書でも、音環境からすれば“~”が付されてもおかしくないにも関わらず、一切この符号が使用されない語が存在するといえよう。


Sari nagara

（p. 12 l. 35）


nagara

（p. 28 l. 8）

“nagara”（ながら）は語中にガ行“g”を含むものであるため、その前の“a”に対して“~”が付されることが期待される。しかし、実際には51例全てに“~”はみられない。これに対して、同じ綴りを含む“nagaraiuru”（永らゆる）には“~”の使用が確認できる（次図参照）ことから、組版や、音的な事情によって“~”が付されていないという訳ではなさそうである。

nãgaraiùru（p. 16 l. 39）

山田（2012）では“~”をオプショナルなものとして位置づけるものの、このような相当数の例すべてに付されないということは、無視はできない。本書のうちに、このようなものがどの程度みられるのか、確認する必要があるだろう。

2. 3 問題設定

山田（2012）では特に音環境を元に、『さんげろく』にみられる“~”の使用環境について整理したが、先にみたように、本書にはそれのみでは説明が困難な例が見受けられる。本稿では、上記で確認した二点に関して、“~”を整理する。そして、それらがどのような条件によるものかを検討する。

3 “~”の使用環境

以下では上記の問題設定に基づいて、『さんげろく』における“~”の使用例を整理し、それぞれ述べた。

3. 1 “~”を付す単位

まず、“~”を付す単位について確認しておく。先に山田（2012）の表データをもとに、“~”と分かち書きとの関係について言及した。「表２」のうちには“g”や“d”、“zz”の子音字の前に、スペースや改行が来る場合であっても、“~”が一定数確認できるため[5)]、単純に語ごとを単位とするとはできないとした。

これを受けて、以下ではスペースを挟んで使用される“~”を整理した。なお、ここでは、多く“~”があらわれる濁子音字であるg, d, zzを含むもののみを対象とした。（引用に際して、煩雑さを避ける目的から、本論に直接関わらないアセント符号“ˋ”（acent grave）は省略した。また翻字については大塚光信（1985）を参照したが、仮名遣いなどは現代のものに直した。以下同様。なお、同じ形式でも品詞が異なるものは品詞名で弁別した。）

格助詞ガ　44例（主格、属格で差がみられないため、ここでは区別しない）

fito to qenqua xite iru tocoroie, bechi no fitõ ga tçuqi ŏte xiqiri ni nacanavoxi vo meſarẽ ta ni iotte
（人と喧嘩して居る所へ別の人がつき合うて、頻りに仲直しをめされたによって：p. 26 ll. 1 - 2）

接続助詞ガ　4 例

go miſſa vo võgamu jibuni（ママ） vôcata buxi（ママ） njin de iranu coto ni nen vo chiraite võgami maraxitã ga, vazato só itaxi maraxenu.
（御ミサを拝む時分に大方無信心要らぬことに念を散らいて拝みまらしたが、態とそう致しまらせぬ。：p. 28 ll. 15-17）

格助詞デ　29例

mi va vua muqĩ de vqẽgŏtarẽdomo

（身は表面（うわむき）で諾うたれども：p. 26 l. 3）

接続助詞デ　2 例

sono aiamari no tçucunoi vo tçutomeĩ de narimaraxenu.

（その誤りの償いを勤めいでなりまらせぬ：p. 14 ll.13-14）

動詞ゴザル　10例

Ma ichido va Padre nõ gozaru tocoro voxitte;

（ま一度はパドレのござる所を知って：p. 28 ll. 10-11）

助動詞ゴザル　32例

tocacu Chriſtian no coto ni tçuite fuxin ga uocotte, utãgai maraxitẽ gozaru.

（とかくキリシタンのことに就いて不審が起って、疑いまらしてござる：p. 16 ll. 15-16）

接続助詞ドモ　12例

tãda tanin no fufu zaifô vo nozomi maraſurẽ domo, sore vo nuſumŏ to vomoi mo ioranu coto de gozaru.

（ただ他人の夫婦財宝を望みまらすれども、それを盗もうと思いも寄らぬことでござる：p. 52 ll. 5 - 7）

接尾語ドモ　5 例

miga tçuqi ai no monõ domo（身が付き会いのものども：p. 32 ll. 3 - 4）

～ガタシ（難し）　2 例

core va tote mo（ママ） no coto ni coraierarẽ gato gozarẽba

（これはとてものことに堪えられ難うござれば：p. 20 l. 33）

～ゴトク（如く）　11例

go zonji nõ gotoqu ,

（御存じの如く：p. 4 l. 12）

～ヅツ　3 例

mono vo ſucoxĩ zzutçu toraxe marasuru.

（ものを少しずつ取らせまらする。：p. 50 l. 1 - 2）

連濁形　10例

Toqĩ doqi mo jacu fai mono to iori óte,（時々も若輩者と寄り合うて、：p. 30 l. 30）

一語が分ち書きされたもの　9 例

tareni mo xitã ga vaĩde tõga bacari fori ĩdaxi maraxita.

（誰にも随わいで科ばかり堀り出しまらした。：p. 42 ll. 33-34）

これらの内に、助詞「ガ」や助動詞「ゴザル」といった、非独立形式が多くみられる点に注目したい。これらは現代語であれば、独立形式と結合して、韻律的単位である音韻語（phonological word）を形成すると考えられる[6)]。このような観点からみれば、『さんげろく』では音韻語の頭には“~”を用いないと整理することができ、“~”は音韻語を単位として付されているということになろう。

この“~”の分布は、次の、ロドリゲス『日本大文典』の記述からも窺える。

Toda a vogal, antes de, D, Dz, G, sempre se pronuncia como com hum meyo til, ou sonsonete que se forma dentro dos narizes o qual toca algum tanto no til.Vt, Māda, mídǒ, mádoi, nādame,nādete, nído, mādzu, āgiuai, águru, ágaqu, cága, fanafáda, fágama, & c. （177丁裏－178丁表）

D, Dz, Gの前のあらゆる母音は常に半分のティルを伴っているように、即ち鼻の中で作られる幾分ティルに近いような響きで発音される。例えば、Māda（未だ）、Mídǒ（御堂）、mádoi（惑い）、nādame（宥め）、nādete（撫でて）、nído（二度）、mādzu（先づ）、āgiuai（味わい）、águru（上ぐる）、ágaqu（足掻く）、cága（加賀）、fanafáda（甚だ）、fágama（羽釜）、など。

（訳は山田昇平（2014）を参照）

ここでは、濁音前鼻音（「半分のティル」）があらわれる環境について、「D, Dz, Gの前のあらゆる母音」としており、子音単独の場合には触れていない。これは、濁音前鼻音が音声的には、前接する母音と共に発せられるものであったため、と考えるべきだろう。つまり、この時代、濁音前鼻音は、音韻語の頭の濁音には生じていなかったものといえるだろう。また、現代語のいわゆるガ行鼻濁音が基本的に音韻語を基準にした環境であらわれることも、これを実態の反映とみる支えとなるだろう。

3.2“~”を付さない語

前節の内容を踏まえると、『さんげろく』では音韻語の頭を除く濁子音字g, d, zzの前に母音字が来るとき、“~”が付されると考えられる。しかし、2.2.2で確認したとおり、これらの環境にあっても、一貫して“~”が付されないものがみられる。以下には、ある程度使用頻度の高いもののうちから該当する例を挙げよう。

ブギョウ（奉行） 8例

sono bugió Miiaco iori cũdararete

（その奉行都より下られて：p. 18 ll. 17-18）

ミガ（身が） 32例（内2例“~”使用）

uãga chiie funbet de facaró to xita coto ua miga aiamari de gozatta

（我が知恵・分別で量ろうとしたことは、身が誤りでござった：p. 16 ll. 31-32）

ナガラ（ながら） 51例

nusǔ da mono to zonji nagara, sono atai va asǒ iuareta niiotte, ſunavachi cai maraxitẽ gozatta

（盗うだ物と存じながら、その価は浅う言われたによって、即ち買いまらしてござった：p. 46 l. 27）

タガイ（互い） 9例

nochi va nacanavori vo xi, iuruxi mo tagaini coi marasuru.

（後は仲直りをし、赦しも互いに乞いまらする：p. 34 ll. 22-23）

サダメ（ム）（定め（む）） 11例

tocacu arãba iarǒ to no ſadame va tabi tabi de gozatta :

（とかく有らば遣ろうとの定めは度々でござった：p. 46 ll. 8 - 9）

ヂャ（～ぢゃ）　16例

vare mo vnazzuite, cotõba de mo nacanaca <u>gomottomo gia</u> to móxite fucai tõga vo vocaxi maraxita.

（我も頷いて、ことばでも中々御尤もぢゃと申して深い科を犯しまらした。: p. 20 ll. 24-26）

デア（～であ）　1例

jifi mo mixiranu cocoro no <u>xiruxi dea</u> tocorode

（慈悲も見知らぬ心の標であところで：p. 60 ll. 26-27）

デ＋アル（～である）　5例（ただし内3例は直前がnのため、不明）

ſadamete nuxĩ ga fafa no <u>ijtçuqe de aró</u> to ſuirió xite

（定めて主が母の言付けであらうと推量して：p. 30 ll. 8-9）

デ＋ゴザル（～で御座る）　101例

goxó vo taſucaru ióni gracia vo ataie cudaſaruru coto gongoni voiobanu <u>von auaremi de gozaru</u>.

（後生を助かる様にガラサを与えくださるること言語に及ばぬ御憐れみでござる：p. 6 ll. 5-7）

デ＋オリアル（～で居りある）　3例

miga <u>fusocu de vori atta</u>.

（身が不足でおりあった。: p. 22 l. 26）

デ＋オヂャル（～でおぢゃる）　5例

tengu no iacu ni nita xiiŏ fucai <u>tõga de võgiatta</u> tocorode,

（天狗の役に似た為様の深い科でおぢゃったところで、: p. 62 ll. 19-20）

デ＋ナイ（～でない）　3例（内2例は直前がnであるため、不明）

fon no xei mon no dai mocu de nai tocorõde

（本の誓文の題目でないところで：p. 56 ll. 30-31）

これらの内には、「デ＋ゴザル」のように、一語の単位ではなく、特定の語のむすびつきに限られるものも含まれる。そのため、以下では、これを差すのに、「言語形式」の略として「形式」の用語を用いる。以下、これらの形式について、個別に検討していく。

3. 2. 1 ブギョウ（奉行）

ブギョウ（奉行）の例は漢語名詞に該当する。「奉」と「行」との間に形態素境界があるものの、『さんげろく』では音韻語の単位を跨がないかぎり“~”は使用される。次のアクギョウ（悪行）なども、漢語形態素「行」を使用している点で共通しているが、形態素境界を跨いでも“~”を使用している。

sono, nochi iorõzzu ni <u>acũguiŏ</u> ni maqete, tçuini, menbocu mademo caronjite ſore to fonni uotoco no tõga uo uocoxi maraxita.

（その後、万事に<u>悪行</u>に負けて、終に面目までも軽んじて、それと本に男の科を犯しまらした。: p. 40 ll. 8 -10）

つまり、ブギョウ（奉行）に“~”が付されないのは、“~”の全体的な使用方針に関わるものというよりは、個別の語の扱い方の問題として考えるべきであろう。

3. 2. 2 ミガ（身が）

この場合の「ミ」は一人称を指す。これについては2例のみ“~”の使用例がみられる。しかし、この形式は“~”を使用した例が全体で32例と比較的多く、内1例は“~”の位置に続いて、この語が通常分かち書きされない位置で改行される。そのため、これについては“~”が付される場合が例外的と判断した。

toqaqu mĩga xĩdai ni toro to no tagai no iacuſocugia.

（とかく身が次第に取ろうとの互いの約束ぢゃ：p. 48 ll. 26-27）

mĩ/ga atari ie buguiŏ ga qite

（身があたりへ奉行が来て：p. 56 ll. 21-22、/ は改行位置）

また、助詞「ガ」は、先に触れたように、これ以外の場合であれば“~”を前接させている。つまり、「身が」の場合のみ“~”が付されないということになる。なお、本書では通常助詞などは分かち書きされるが、「ミガ」の形式については分かち書きをされず“miga”と一まとまりで書かれている。この点に注目すると、本書において「ミガ」の「ガ」は単純に助詞として扱われているというよりも、「ミガ」を一語として扱っているとも考えられ、やや注意が必要であろう。しかし、同様に分かち書きをされない「ワガ」（我が）の形式には“~”を付しているから、「ミガ」の形式に“~”が使用されないという点についても、個別に扱うべきものだろう。

Mata : vãga votto va ĩgi no varui mono narẽba

（また、我が夫は意地の悪い者なれば：p. 34 l. 24）

3. 2. 3 ナガラ（ながら）

「ナガラ」については2. 2. 2で触れた通りであるので、改めて挙げることはしない。

3. 2. 4 タガイ（互い）

「タガイ」については、同じ音形を含む「ウタガイ」（疑い）や「シタガイ」（従い）などに“~”の使用が確認される。やはり“~”の使用は音形というよりは、意味とむすびついた特定の形式ごとに定まっていたものと考えるべきだろう。

tocacu Chiriſtian no coto ni tçuite fuxin ga uocotte, utãgai maraxitẽ gozaru.

（とかくキリシタンのことに就いて不審が起って、疑ひまらしてござる：p. 16 ll. 15-16）

tãda Deus no gofacarai bacari ni xitãgai

（ただデウスの御計いばかりに随い：p. 22 ll. 24-25）

3. 2. 5 サダメ（ム）（定め（む））

「サダメ」は、名詞としての使用のほか、「サダメテ」や「サダメタ」、「サダムル」といった動詞としての、活用した形が複数確認されるが、いずれも“~”は付されない。つまり、“~”

を使用するかしないかは、音形の差に関わらず、特定の形式に同定できるかどうかが規準となっていたと考えられる。

Deus no uon ſadame no fi ga qitaró toqi ua
（デウスの御定の日が来たろう時は：p. 12 l. 23）
mo faia catçute aru mai to ſadameta rẽdomo
（も早會て有るまいと定めたれども：p. 36 l. 15）
ſadamete sono bun de aró made de gozaru.
（定めてその分であろうまででござる：p. 14 ll. 31-32）
navo catŏ ſadamuru tame ni xei mon no iacu ſocu vo ſaxeraruru tocoroni
（なお堅う定むる為に誓文の約束をさせらるるところに：p. 56 ll. 24-25）

3. 2. 6 コピュラ形式

ここでは「ヂャ」「デア」「デ＋アル」「デ＋ゴザル」「デ＋オリアル」「デ＋オヂャル」「デ＋ナイ」の文末表現の形式が、いずれもいわゆるコピュラ形式にあたることに注目し、これを一括する。例えば、現代標準語のコピュラ形式「ダ」などであれば、「ダ」は基本的には前の要素とともに音韻語を構成すると考えられる（それは｜もっともだ｜）。『さんげろく』当時の日本語の韻律単位が現代語と同じであったとは限らないが、ひとまずそのように仮定するのであれば、“~”を付しても問題のない環境ということになる。

なお、「デ＋ゴザル」については、成（1993）に既に指摘があるが、ここでは、これらの形式をまとめて論じる目的から、改めてこれを取り上げる。

これらの形式には多く「デ」の形式が含まれるが、この形式は後に「アル」「ゴザル」「ナイ」といった存在表現を伴わない場合には“~”の使用が確認される。つまり、コピュラ形式となる場合に限って“~”の使用が制限されたものと考えられる。

varerã ga nhóbó cõdomo no inochi vo nogareôzuru tameni tçuini cuhi bararĩ de corõbi maraxita.
（我等が女房子供の命を遁れうずる為に、終に口ばかりで転びまらした：p. 18 ll. 21-23）
fãdato fãdato auaxeta tocorõ de, mo faia figa moietatte
（膚と膚と合わせたところで、も早火が燃え立って：p. 38 ll. 38-39）

なお、『さんげろく』と同じくコリャードの著作である『日本文典』においても同様の傾向がみられる[7)]。その上で『日本文典』の次の例は注目すべきであろう。

zo（ぞ）のある叙述では、しばしば疑問の助辞baxi（ばし）が使われる習慣がある。例. nanto xita xidaĩ de baxi gozaru zo？（何とした子細でばしござるぞ？）、sate nanto iú uoqiacu de baxĩ gozaruzo？（さて何と云ふお客でばしござるぞ？）、goiô baxi gozaruca？（御用ばしござるか？） （大塚訳p. 86）

「デ」と「ゴザル」の間に副詞「バシ」が挿入され、この場合には「デ」の前に“~”が付されている。このような例は現段階でこの一例のみしか確認できないが、これを重視するなら、“~”が付されないのは「デ」＋「ゴザル」が直接続く環境に限定されたものということになろう。

これらから、『さんげろく』や『日本文典』では特にコピュラ形式をとる場合には音韻語の

中にある濁音の前であっても“~”を付さなかったということが分かる。つまり、ここでみたコリャードの著作では、特定の表現形式を意識した“~”の使用方針が存在したものと考えられる。

3.3 これは誰の方針か

以上、『さんげろく』にみられる濁音前鼻音を示す“~”について、この符号を付しても問題のない環境にも関わらず、一定して付されない形式があることを確認した。これらは、同様の音形を含むものには“~”が付される例が確認できる場合があり、また活用した場合や、異なる形態素で構成されていても、コピュラ形式であれば全て付されないといったことなどから、本書では特定の形式を意識して、“~”を使用しない方針が定められていたと考えられる。この方針は『さんげろく』内で一貫している。つまり、“~”は形式ごとにも、一定の規則に則って使用されたとみるべきであろう。ではこの規則は誰によって定められたか。

『さんげろく』や『日本文典』は活字によって出版されたものである。このようなプロセスを経たものでは大まかにみても、著者の外に印刷時の版面作成者などの手が加わる可能性がある[8)]。しかし、同じく“~”が使用される、コリャード自筆本の『西日辞書』をみると、ほぼ『さんげろく』と同様の傾向が確認できた。『さんげろく』で“~”が使用されないもののうちでも、『西日辞典』でも確認できる形式を以下に示す。これらは用例数の規模は『さんげろく』とは異なるものの、いずれも“~”が付されていない[9)]。

ブギョウ（奉行） 1例

pesquisidor. buguiŏ.

（pesquisidor. 奉行：69丁裏 l. 15）

ナガラ（ながら） 4例

go taiĝui nagara.

（御大儀ながら： 7丁表 l. 27）

⇔ biuir y pasar la vida. naĝaraye, uru.

（biuir y pasar la vida. 永らえ、うる：31丁裏 l. 34）

タガイ（互い） 2例

de concierto. tagai ni.

（de concierto. 互いに：13丁表 l. 36）

サダメ（ム）（定め（む）） 7例

deue de ser, o sin duda. sadamete.

（deue de ser, o sin duda. 定めて：31丁裏 l. 28）

⇔ clara y patentemente. saďaca ni.

（clara y patentemente. 定かに：15丁裏 l. 25）

ヂャ（ぢゃ） 2例

sore va maẑzu itçuvari gia.

（それはまず偽りぢゃ：1丁表 l. 8）

⇔　tçuchi d̃e cavara vo tçucuru.

（土で瓦を作る：67丁裏 l. 13）

デゴザル（で御座る）　9例

core ga tabefajime mata mifajime de gozari, u.

（これが食べ始めまた見始めでござり、る：59丁裏 ll. 37-38）

この点から、本稿では『さんげろく』にみえる“~”の使用法を、著者コリャードの意図が反映されたものと判断する。つまり、コリャードは濁音前鼻音を示す“~”の使用方針を、形式ごとについても定めていたということになる。

4 方針の背景

4. 1 言語実態の反映である可能性

以上、『さんげろく』の“~”について確認したのは以下の二点である。

① “~”は音韻語単位を基準に付され、この頭に濁音がある場合は“~”は使用されない。

② gやd、zzと言った濁子音字であっても、一貫して“~”が使用されない特定の形式が存在する。

この二点から、『さんげろく』における“~”は、その使用について子音字以外にも厳密な使用条件が存在していたことが窺える。このような条件は何に基づくものか。

まず、①については3.1で触れた通り、ロドリゲス『日本大文典』の記述や現代のガ行鼻濁音との対照から当時の言語実態が反映したものと考えて差し支えないだろう。一方で、②については、言語実態を反映である可能性は完全には否定できないものの、他の資料などからそれを支持する証拠は得られない[10)]。そのため、本書の“~”の使用を当時の言語実態と積極的に認めることはできない。

4．2 ②は何を反映するか

②で、特定の形式について“~”が使用されないことを指摘したが、本稿では、コリャードがこれらの形式の濁音前鼻音を、積極的に否定していたとは考えない。これは“~”の不使用を当時の言語実態の反映として捉えがたいとした以上、自然な見方であろう。また、コリャードが独自の見解からこれらの濁音前鼻音を否定していた可能性も想定できようが、そのような事情は考えにくいのではないか。

『さんげろく』で使用される“~”がオプショナルな性質である以上、g, d, zzの濁子音字前の環境であれば、符号がないということに積極的な意味を持たせるのは難しい。つまり、一貫して“~”が付されない形式であっても、実際には濁音前鼻音が存在するものとして扱われていたと考えるべきだろう。

特定の形式における“~”の不使用が言語的な事情によるものではないなら、コリャードが別の事情から“~”の使用規準を定めていたということになる。当然、偶然である可能性も否定しきれないが、“~”を一貫して付されない形式に、比較的用例数の多いものが含まれる点や『日本文典』や自筆の『西日辞典』などにも同様の傾向が確認できた点などから、表記法を選んで

いたと考えるのが自然であろう。そのため、ここには一定の意図を読み取るべきであるが、3.2で個別に検証を加えた限りでは、この選択基準について体系性をみいだすことは難しい。これらの形式の選択は、統一した基準に基づくものではなく、コリャードが恣意的に行なったものとみるべきではないだろうか。

ただし、「ヂャ」「デ+ゴザル」のような、コピュラ形式については、実態を反映していた可能性が残る。つまり、これらの形式が、当該時期に、前部の形式と音韻語を構成していなかった可能性は否定できない。例えば鎌倉時代語において、独立形式（名詞、動詞）とそれに続く非独立形式（助詞、助動詞）が、アクセントの単位として必ずしも一単位にならない場合があること（金田一春彦（1964））や、非独立形式の「まほし」が和歌の音数制限から「ま」「ほし」に分けることができる（奥村悦三（1993））などいった指摘があることからも、日本語の音韻語の単位が歴史的に一定でないことは、議論の余地がある点といえよう。これについては、他の資料や、これらの形式の統語的な振る舞いと合わせて考察を加える必要がある。今後の課題としたい。

このように、本稿で指摘した①、②の分布については、当時の言語の実態とみることができる点と、コリャードの書記方法とみるべき点とで分けられよう。

5まとめ

以上、『さんげろく』の“~”について、特に濁子音前であっても使用されないものに注目し、この分布を整理した。具体的な指摘は4.1で既にまとめた通りである。またこれらの解釈として、この分布が言語実態として考えることができるものと、コリャードの書記方法から説明されるべきものの二種あることを述べた。

また資料上の問題として、本稿での考察からは、コリャードの言語意識の細かさが窺えよう。ここで確認した、“~”の使用・不使用の方針は、それが恣意的な選択であったとしても、個々の形式に至るまで定められており、コリャードが個々の形式まで意識した書記方針をとっていたことがわかる。つまり、『さんげろく』をはじめとするコリャードの著作には、日本語表記について、かなり詳細な取り決めがなされているといえよう。このような取り決めが言語的にどのような評価が下されるべきものかは別として、コリャードの意図が細かに渡っている点は、本書を性格付ける上で重要なものだろう。

注

1）これは例えば、tōga（科）のように、主に母音字の上部に付す形で用いられる。一般的には「アクセント符号」と呼ばれるものであるが、本書で用いられるこれらの符号は、日本語学の術語である「アクセント」以外を示すのにも用いられる。そのため、本稿ではポルトガル語の“acent”を用いて弁別する。

2）山田昇平（2012）、岩澤克（2013）など

3）これについては、豊島正之（2013：131-133）にまとめられる。

初期のローマ字本キリシタン版の「サントスの御作業」（一五九一）、「ドチリナキリシタン」

（一五九二）、「ヒイデスの導師」（一五九二）では、助詞は、一音節の「が」「の」「に」「を」「へ」「も」なども含めて、全て分かち書きされている。恐らく、初期キリシタン版ローマ字本は、ラテン語・スペイン語等と同様に、分かち書きは「語」に就て行なうという単純な規則から出発したのであろう。（中略）

助詞の分綴は、「平家物語」のN折までで、続くO折から（古田啓の指摘）は、一音節助詞の分かち書きは廃され、こうした曖昧さは緩和された。しかし、逆に「語による分かち書き」の原則が崩れ、キリシタン版ローマ字の分かち書きは、「平家物語」の後も安定せず、様々なバリエーションが現れている。

4）本書で多くみられるのは次のような分かち書きである。
IMa Padre ſama no von fiſſocu no ſacari de gozarẽba
（今パドレ様の御逼塞の盛りでござれば：p. 28 l. 7）

5）d：51例、g：119例、zz：5例

6）このようなものを差す術語に、伝統的な文法用語である「文節」があるが、“~”が示す濁音前鼻音が音的事象であることを鑑み、本稿ではこれを採用しない。
音韻語（Phonological word）は、Dixcon and Akihenvald（2002：13）で次の通りに定義される。

A phonological word is a phonological unit larger than the syllable（in some languages it may minimally be just one syllable）which has at least one（and generally more than one）phonological defining property chosen from the following areas:

（a）Segmental feature – internal syllabic and segmental structure ; phonetic realisations in terms of this; word boundary phenomena; pause phenomena

（b）Prosodic feature – stress（or accent）and/or tone assignment; prosodic feature such as nasalization, retroflexion, vowel harmony.

（c）Phonological rules – some rules apply only within a phonological word; others（external sandhi rules）apply specifically across a phonological word boundary.

なお、日本語における音韻語がどの範囲になるかについて、菅原真理子（2014：123）では「内容語とそれに後続する助詞を含む領域」とする。確かに、日本語のアクセントが助詞までをひとまとまりにして実現することや、菅原（2014）で挙げるガ行鼻濁音（同論では「鼻濁音化」）の事象などは、上記の（b）に該当する。よってこれにしたがっておいて問題ない。以上から、本稿では音韻語（Phonological word）の術語を採用する。

7）「ヂャ」：7例、「デゴザル」：20例、「デアル」：4例、「デワナイ」：1例。いずれも“~”なし。ただし、索引を中心に調査したものの、索引に未収録のものもあり、未確認のものもあるかと思われる。

8）豊島正之（1999）及び（2013）

9）なお、写本である『西日辞典』では版本と“~”を付す箇所が異なる。『さんげろく』のような版本ではこの符号は直前の母音に付されるが、写本である『西日辞典』では直接濁子音の上に付されている。
版本：tõga⇔写本：toĝa
このような書記方法の差はあるものの、両者の使用環境に著しい差がある訳ではない。そのため、ここでは両者を同様に扱う。

10）例えば朝鮮版『捷解新語』のハングル表記では、『さんげろく』であれば“~”が付されない語についても、濁音の前に鼻音表記が確認される。以下には確認できたものについて一例ずつ挙げておく（「」内の翻字は筆者による）。

ナガラ：naŋ-ka-ra（「ながら」一巻三丁裏）、タガイ：taŋ-ka-i-ni（「互いに」三巻一丁表）、サダメ：san-ta-myəi（「定め」一巻二十八丁裏）、ヂャ：kon-zon-zin-cyan-hon-to-ni（「御存知ぢゃ程に」

三巻十四丁表)、デ+ゴザル:o-ta-no-mi-pa-kka-rin-tyəi-ŋko-za-ru(「お頼みばかりで御座る」一巻三丁裏)

『捷解新語』のこれらの表記がどのような性質ものであるか、それ自体を検討する必要はあるものの、ここでは『さんげろく』と同様の傾向をとる資料が確認できないという点を確認しておく。

参考・引用文献

岩澤克(2013)「コリャード『懺悔録』の表記の特質―イエズス会資料との差異」『上智大学国文学論集』46

大塚光信(1985)『コリャードさんげろく私注』臨川書店

奥村悦三(1993)「文節の分析」『奈良女子大学文学部研究年報』36

金田一春彦(1964)『四座講式の研究―邦楽古典の旋律による国語アクセント史の研究各論(一)』三省堂(『金田一春彦著作集』第五巻(玉川大学出版部　2005)による)

小島幸枝(1972)「コリャードのアクセント―西日辞書の自筆稿本をめぐって― 」『国語国文』41-11

菅原真理子(2014)「句レベルの音韻論」菅原真理子編『朝倉日英対照言語学シリーズ3　音韻論』朝倉書店

成嘻慶(1995)「コリャード著『羅西日対訳辞書』のティルデ表記について」『東北大学言語学論集』4

土井忠生(1971)『吉利支丹語学の研究　新版』三省堂

豊島正之(1999)「キリシタン版は何故印刷されたか」『刷りものの表現と享受』北大国文学会

豊島正之(2013)「日本の印刷史から見たキリシタン版の特徴」豊島正之編『キリシタンと出版』八木書店

森孝宏(1972)「D. Colladの鼻音符号について」『今泉博士古稀記念国語学論叢』桜楓社

山田昇平(2012)「D. コリャード著『さんげろく』の“~”」『語文』99 大阪大学国語国文学会

山田昇平(2014)「ロドリゲス『日本大文典』における“sonsonete”―濁音前鼻音記述をめぐって―」『四天王寺大学紀要』58

Dixcon, R. M. W. and Akihenvald, Alexandra Y. 2002. Word: Across-Linguistic Typology, Cambridge: Cambridge University Press.

参考・引用テキスト

コリャード『さんげろく』:『コリャード　さんげろく私注』(臨川書店　1985)

コリャード『日本文典』:大塚光信訳『コリャード　日本文典』(風間書房　1957)

コリャード『西日辞書』:『コリャード自筆西日辞書』(臨川書店　1985)

ロドリゲス『日本大文典』:『日本文典』(勉誠社　1976)、土井忠生訳『ロドリゲス　日本大文典』(三省堂　1955)

『捷解新語』:『捷解新語　本文・索引・解題』(京都大学国文学会　1957)